

二〇一七年八月二十七日 主日礼拝説教要旨
テサロニケ人への手紙第一⑤（津田姉洗礼式）

伝道者の喜び、教会の喜び

（「テサロニケ二・一三〜二〇」）

余っていたコストコ販売の激安中華スマホを復活させた。老眼がひどく、画面の大きさには勝てなかったのだ。しかしそのまま使うのも芸がない。ということだ。いぶ前に購っていたひと山三百円のヌメ革を引つ張り出し、ケースを自作してみた。我ながら上出来である。三百円で得られる喜びと「いいね」、そして称賛の声。悪くない。しかしこれは伝道者が持つべき本筋の喜びではない。

閑話休題。今朝の個所を読むとほつとする。戦う使徒、パウロにも心を許せる教会があったのだと思うと心底「いいね」を押したくなる。ここにいるのはガラテヤ教会を「愚か者」とのしり、コリント教会には「あなたがたをほめるわけにはいかない」と指導した戦う使徒ではなく、信徒の変化を心から喜び称賛する伝道者だ。以下彼の喜びの理由に迫りたい。

一、神のことばの受容

パウロがテサロニケ教会のことで神に感謝していた第一の理由は彼ら

がパウロの語ることを神のことばとして受け入れたという事実にある。テサロニケの信徒たちの多くはユダヤ教にシンパシーを感じていた異邦人であり、会堂での聖書の解き明かしに慣れていた人々であったが、彼らはパウロの言葉を神の権威あることばとして受け入れた。語っているパウロはもちろん人間である。しかしテサロニケの人々はその背後にある神の偉大な力と働きをそのまま信じ受け入れた。別の言い方をすれば彼らはパウロのことばに留保を持たなかったとも言える。「ここまではアーマンですが、これは受け入れられません」といった部分的受容ではなく、語られるメッセージをまさに神ご自身が語ることばとして受け入れたのだ。これは自分の福音が即神の福音となっているパウロにとって実に喜ばしいことであった。

二、神のことばによる成長

パウロの感謝はテサロニケの兄弟姉妹の入信時にとどまらない。パウロは信じる者に働く神の力をよく知っていた。興味深いのは一三節の「信じている」と「働いている」が共に現在形で書かれていること。つまりパウロが問題にしているテサロニケ教会に起こっている信仰は過去ではなく、今である。形骸化した知識ではなく、神の工

ネルギーのリアルな放出である。ではその働きは何によつて具体化されているのだろうか。一言でいえば彼らテサロニケのクリスチャンたちの信仰姿勢である。彼らは他のイエスに従う者にならう者となった。具体的にいえば周囲の無理解や迫害にも屈せず、神を愛し、キリストに仕えるものとしての歩みを止めなかったということである。これはイエスが語られた「患難の中でも勇敢であれ（参考：ヨハネ一六・三三）」に通じる姿であり、「為ん方尽くれども望みを失わず（ヨコリ四・八・文語訳）」というパウロの信仰にもかなっている。神のことばによつて彼らは改革され続けたのである。

三、自らの活動の結実

このようにパウロが不在となつてからも神のことばはテサロニケ教会に働き続けた。それはとりもなおさず使徒パウロの働きがあかしされることになる。パウロはある意味において結果にコミット（！）する伝道者だった。「一生懸命やりさえすればよい」とは思っていない。そのことは二・一や三・五辺りを見れば非常に明確である。また「コリント三章辺りを見れば使徒としての自らの働きが終末において試され、吟味されるということに一定の危機感を持っていたことは明白だ。そのよ

うに真剣勝負で生きていたパウロにとつて、テサロニケ教会のクリスチャンたちの入信、そして成長のプロセスはまさに自分の働きの正統性のこれ以上ないあかしであった。だからこそパウロは彼らを終末の裁きの日に主が自らに与える義の冠そのものだと称賛し、それをもつて神をたたえ、かつ感謝していたのである。

* * *

SNSの#リサイクル日記に「いいね」が増えるのはうれしいことだ。三百円工作を称賛される気分も悪くはない。しかし私も伝道者の端くれ。そういう喜びに生きていくわけではない。私の喜び、それは教会の兄弟姉妹が神のことばを心から受け入れ、神のエネルギーを体験し、変革した歩みを続けていくこと、これに尽きる。ここはパウロと一緒にいる。四月に受洗者が出なかったことは実に残念だったが、主は私たちの教会に真実な喜びをくださった。五月末、妹さんのネット越しの個人伝道により入信された津田姉妹が主の導きによつてベテルに來会されて今日洗礼の恵みにあずかる。一体教会にこれ以上の感謝、これ以上の喜びがあるだろうか。あつていいのだろうか。人が救われると天上では大宴会だという。我々もその席に着き大いに喜ぼうじゃないか。Rejoice!